

残留V2について

About Residual V2

阿部幸一†
Koichi ABE

Abstract: V2 (Verb-Second) is considered to be typical for German Languages. Since English belongs to be German family, Old English and Middle English seem to show V2. On the other hand, it is considered that Present-day English does not show V2. Therefore, it is commonly believed that V2 disappeared after the period of Middle English. However, in the environment when an operator (such as *wh*-phrase) appears in Present-day English, the verb still appears after the operator. So, it is called Residual V2. Then we will explain why V2 remains as a form of residual in Present-day English.

1. はじめに

V2 (Verb Second:動詞第二位置) 現象に関しては、OE/ME 初期あたりまで存在したと仮定されるが、ME 後期以降には見られなくなったと仮定される。但し、演算子を含む文では V2 とと思われる現象が現代英語においても残っていると仮定されることから、残留 V2(residual V2)と呼ばれている。ここでは、なぜ現代英語でも、残留という形で V2 が残っているのか考察する。

2. 残留V2

Kemenade (1987)によると、V2 が消失したのは、おおよそ 1400 年頃だと仮定されている。V2 構造に関しては、den Besten (1983) においては、話題化要素が CP の指定辞位置に生じて、それを認可するために、動詞は主要部の C に移動すると仮定されている。おおよそ次のような構造が仮定されている。

(1) [_{CP} topic [_C V_i [_{VP} t_i ...]]

(ここで、den Besten が動詞が C の主要部へ移動すると仮定する理由の一つとしては、C の主要部位置に補文標識が生じる埋め込み文では、動詞の移動先である C に補文標識に満たされているため、ドイツ語の埋め込み文では V2 現象がみられないことが説明されるからである。)

ところが、英語の場合、接語が生じると、動詞の左側に来るため、一見すると、V2 構造を破っているように見える。

(2) & icc *itt* hafe forþedd te,
and I it have completed you
'and I have completed it for you,'

(CMORM, DED. L23. 8)

しかし、接語は動詞に付加して、接語と動詞が一体化して、いわば複合動詞 (complex verb) を形成していると仮定することができる。すると、この構造では V2 が保持されていることになる。¹⁾

(3) icc [_v *itt* +*hafe*] forþedd te

ところが、OE/ME 前期においては、演算子が文頭に来ると、OE 期の特徴の一つであった、接語が生じると V2 を破るという現象が、動詞が演算子の右に移動するため、接語は動詞の右に取り残されるので、V2 構造が保持されているように思われる。

(4) a. for hwam noldest þu te sylfe me gecyðan þæt
for what not-wanted you your self me make known that
'wherefore would you not want to make known to me
yourself that...'

b. þa foron *hie* mid þrim scipum ut
then sailed they with three ships on
'Then they sailed out with three ships'

c. ne sceal *he* naht unaliefedes don
not shall he nothing unlawful do
'He shall not do anything unlawful'

(Fisher, Kemenade, Koopman and Wurf (2000: 118))

(4a)では、wh 要素の for hwam が文頭に生じて、動詞の noldest が第二位置に生じ、接語の þu は第三位置に生じている。(4b)では、副詞の þa は第一位置に生じ、動詞 foron

† 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

は第二位置、接語の *hie* は第三位置に生じている。(4c) では、否定語の *ne* が文頭に生じて、動詞 *sceal* が第二位置、接語の *he* が第三位置に生じている。

これらの構造では、*wh* 要素、文頭の副詞(*pa*)、否定要素等は、いわば演算詞的に文頭に生じて、文全体を作用域として取っていると仮定することができる。これらの要素が生じる位置は、通常の CP のさらに上の位置にある指定辞位置に生じていると仮定すると、それを認可するために、動詞はその上の主要部の位置に移動して、その演算子を認可すると考えると、演算子構文における V2 現象を説明できる。また、この演算子の解釈に関して接語は関与しないので、動詞と一緒に移動されず、下の C の位置に残ると仮定すれば、演算子の V2 に関して、接語が移動しないことが説明される。CP の上にあつて、演算子の生じることのできる範疇に関しては、Pintzuk (1993) の CP recursion の仮定を採用する。Pintzuk は、スカンジナビア本土語(Scandinavian mainland language)では、橋渡し動詞(bridge verb)が肯定的(positive)で現実的(realis)の場合には、埋め込み文での V2 が可能であることから、CP の繰り返しによる、次のような構造を仮定している。

(5) デンマーク語

Hun sagde [_{CP1} at [_{CP2} kaffe_i [_{C2} drikker_j [_{IP} Peter ikke _{t_j} t_i]]]]
 she said that coffee drinks Peter not
 ‘She said that Peter doesn’t drink coffee.’
 (Pintzuk (1993:8))

(5)の構造では、補文標識が上の CP にあり、V2 は下の CP で起こっている。これにより、ドイツ語等で見られた補文標識が動詞移動を阻止する構造が回避されて、補文での V2 が可能となる。

CP recursion の考えを我々の枠組みで採用すると、話題化の V2 のために下位に CP があり、演算子の V2 のためにはさらに上位にも CP があると仮定する。ここで、演算子の V2 が行われる CP が話題化の V2 が行われる CP よりも上位にあるのは、話題化が文内の要素を話題化しているの、その範囲が文内に限定されるのに対し、演算子は、文全体に関わるので、文の範疇の上にあると仮定されるからである。²⁾

(6) [_{CP} operator C [_{CP} topic C [_{VP} V ...]]]

話題化要素が生じる場合には、動詞はそれを認可するために、下の CP の主要部 C へ移動して、話題化による V2 構造を形成する。一方、演算子が来る場合には、動詞はさらに上の CP の主要部 C へ移動して、演算子による V2 を形成する。

しかし、den Besten (1977)以降 V2 構文に関して考えられて来た機能範疇に関して、最近では言語の進化論的な考察から、別の考えが提案されている。すなわち、子供の言語発達と同じように、OE 期の段階ではまだ CP のよ

うな機能範疇は進化していないという仮説が Osawa (2009)で行われている。これに類似の仮定として、Y. Hosaka (2009)では、ドイツ語の V2 現象を説明するために、ドイツ語ではまだ CP と TP の分化が行われていなくて、両方を兼ねる範疇として FP が仮定されている。ここでは、英語の V2 現象を説明するために、Y. Hosaka (2009)に基づいて仮定する。すなわち、OE 期の段階では、CP と TP を兼ねる FP が存在したと仮定する。すると、(2)のような文は、次のような構造を示すと仮定される。(7) [_{FP} icc_i [_F itt_j+hafe_k] [_{VP} t_i t_k forþedd t_j te]]

この構造では、VP 内に生じた代名詞は、接語となって動詞に付与され、主要部の F へ一緒に移動して、V2 構造を示すと仮定される。

一方、この段階における演算子に関わる構造は、次のような構造と仮定される。

(8) [_{FP} for hwam_i [_F noldest_j [_{FP} þu_k+t_j [_{VP} t_k te sylfe t_j me gecyðan þæt t_i]]]]

この構造で、演算子である *wh* 要素が上位の FP へ移動し、代名詞は接語となって動詞に付与し、動詞と共に下の F へ移動するが、動詞はさらに上位の演算子を認可するために上位の F へ行くものの、接語は演算子の解釈に関与しないので、下位の F に残される。これは OE 期の特徴であった接語が来ると V2 が破られるという現象が、演算子の来る構造では、逆に動詞の後に接語が来ることによって、V2 が保持されることが説明される。

一般に英語においては、V2 が消失するのは、ME 初期と仮定されるが、Haerberli (2002)が指摘するように、実際に消失するのは話題化による V2 だけであつて、演算子に関わる V2 は現在でも残っていると仮定される。例えば、次の(9a)では、*wh* 要素が文頭に来て、(助)動詞は 2 番目に来ているので、V2 現象を示す。(9b)の Yes/No question は一見すると演算子に関わっていないように見えるが、空の演算子 (empty operator) があると仮定すると、(助)動詞は 2 番目に来ることになる。そして、現在でも V2 が残っていることから、これらの現象は残留 V2 (residual V2)と呼ばれる。

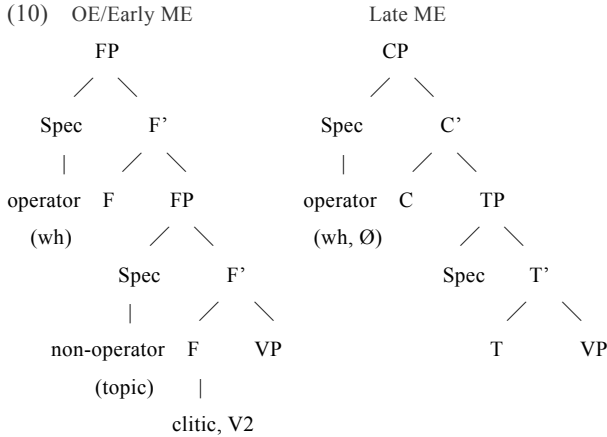
(9) a. Where *did* you go?
 b. Are you happy?

話題化による V2 の消失及び演算子の構造において残留 V2 が残る過程を次のように考える。

- i) OE/ME 初期に存在した FP が、言語の進化にしたがつて、CP と TP に分化する。ここで、CP は文全体に関わる機能範疇、TP は文内に関わる機能範疇であると仮定する。
- ii) 下位の FP の指定辞に生じていた話題化要素は、話題化を担っていた下位の FP が TP に変容して、その主要

部が主語になったことにより、従来話題化が担っていた FP の役目を終了し、その主要部の F 自体も消失する。結果として、話題化による V2 も消失することになる。

- iii) 一方、上位の FP は、文全体に関わる新たな機能範疇である CP に変容し、その主要部 C には (助) 動詞が来ることを要求するので、これによって残留 V2 が説明される。



よって、(9)の構造は、次のような構造を成すと仮定される。

- (11) a. [CP where_i [C did_j] [TP you_k t_j [VP t_k go t_i]]]
 b. [CP Ø-operator [C are_i] [TP you_j t_i [VP t_j t_i happy]]]

これらの構造で、(助) 動詞は、演算子の右に来て、残留 V2 を形成すると仮定する。

3. まとめ

ここでは、V2 をめぐる話題化と演算子化との違いを見てきた。共に CP と TP に分化する前の FP に関与し、演算子に関わる V2 は文全体に関わることから上位の FP に関与し、一方話題化による V2 は文内の要素に関わることから、下位の FP に関与すると仮定した。その後、ME 後期に主語が卓立する構造に変化するのに伴い、FP が CP と TP に解体する。その際、上位の FP に関与していた演算子の V2 は、機能範疇が FP から CP に変容するが、その文全体に関わる演算子の特性には変化はないので、いわばこれが残留 V2 として今日も残ることになる。一方、下位の FP に生じていた話題化の V2 は、FP から TP に変容するとともに、TP の指定辞位置には主語が義務的に来ることに伴い、話題化要素は、もはや居場所がなくなり、自動的に消滅する。

以上のことから、従来考えられて来たように、英語は ME 期に V2 を完全に消失したのではなく、V2 自体は、残留 V2 という形で現代英語でも存続しており、消失し

たのは話題化に関わる V2 だけであるので、英語がゲルマン語の特徴の一つである V2 を、たとえ残留であっても保持していることから、本質的な性質には変わりがないことになる。

(注)

1) 接語の定義に関しては、諸説あるが、Kemenade(1987, p.134)では、接語の一般的特徴として、次の4つを挙げている。

- (i) a. clitics occupy A'-position
 b. clitics absorb case
 c. clitics do not absorb θ -role
 d. OE has no dummy case-marker

ここで接語は、その主要部によって下位範疇化される適切な NP 位置と同一指標されており、その NP 位置は θ 役割を保持するが、一方接語は格を持って、A'-位置である接語位置(V',INFL)と COMP へ移動できるとしている。そこで、私は Kemenade に基づき、接語とは通常的位置にない代名詞と考える。

2) CP recursion は英語においては、主節に限定する。なぜなら埋め込み分で wh 要素が来た場合には、V2 移動が起こらないのからである。

- (i) þa com god and axode hwi he his behod *tobraece*
 then came God and asked why he his commandment broke
 'then God came and asked why he had broken his commandment'

(ÆCHom I,1.18.12;Fischer et al.(2000:115))

参考文献

- Abe, Koichi (2010) "Fukushi to Setsugo to V2 to (Adverbs, Clitics and V2)," *JLY*, 43, 53-79, Nagoya University.
 den Besten, H (1983) "On the interaction of root transformations and lexical deletive rules," in Abraham eds. (1984), 47-131.
 Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
 Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
 Haeberli, Eric (2002) "Inflectional morphology and the loss of V2 in English," In Lightfoot, D ed. *Syntactic Effects of Morphological Change*, 88-106, Oxford University Press, Oxford.
 Hosaka, Yasuhito (2009) "Notes on Functional Categories in German," *English Linguistics* 26, 460-475.
 Hulk, Aafke and Ans van Kemenade (1995) "Verb second, pro-drop, functional projections and language change,"

in Battye & Roberts eds.(1995) 227-256.

Kemenade, Ans van. (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris Publications, Dordrecht.

Miyashita, Harumasa (2004) “Cliticization in the History of English: Loss of the Subject Position Asymmetry and the Wackernagel Pronominal Object,” *Linguistic Research* 20, 103-154.

Osawa, Fuyo (2009) “The Emergence of Functional Categories in the History of English: Ontogeny and Phylogeny in Language,” *English Linguistics* 26, 411-436.

Pintzuk, Susan (1993) “Verb seconding in Old English: verb movement to Infl,” *The Linguistic Review* 10, 5-35.

Trips, Carola (2002) *From OV to VO in Early Middle English*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.

Corpus

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Pennsylvania.

(受理 平成26年3月19日)